

論文内容要旨

日本人女性の片頭痛患者における咬合状態の特徴

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

歯科矯正学講座 武内 美文

(指導：河田 俊嗣 教授)

論文内容要旨

近年、診断基準の国際的標準化によって、頭痛の疫学的特徴が明らかになってきた。片頭痛は、世界保健機関（WHO）が制定した日常生活に支障をきたす疾患では19位に位置づけられており、患者は薬代、診療代に多額の出費を必要としている。仕事を休むことを含めた経済的損失は非常に大きく、現代病として無視できない。一方、歯科治療により機能的・生理的な咬合を確立することで、頭痛が改善したという例も報告されている。このメカニズムを理解するために、頭痛や顎関節症との関係についてもいくつかの報告がある。しかし、これらの研究では頭痛を一次性頭痛としており、片頭痛の成人女性のみを対象として不正咬合との関連性を研究したものは我々の知る限りで報告がない。そこで今回我々は、20～40代女性を対象とし、片頭痛群と非片頭痛（コントロール）群間で不正咬合の特徴に差があるのかを調べるために本研究を行うこととした。

被験者は、神奈川歯科大学附属横浜研修センター・横浜クリニック頭痛外来にて、国際頭痛分類第二版により診断を受けた片頭痛群60名（平均年齢39.3歳）とコントロール群57名（平均年齢37.9歳）とした。すべての被験者に対し、頭痛問診票、基礎調査表（年齢、身長・体重、平均睡眠時間、平均基礎体温）、口腔内写真撮影、上下顎歯列の印象採得を行った。上下顎歯列模型より、アングルの分類、オーバージェット、オーバーバイト、前歯歯冠内開口角、前歯正中線の偏位、欠損歯数、くさび状欠損歯数を測定した。これらの資料をもとに統計を行い、片頭痛群とコントロール群間での違いを比較した。

その結果、両グループ間において年齢、Body Mass Index、睡眠時間、平均体温に有意差はなかった。模型所見においては、片頭痛群ではコントロール群と比較し、オーバージェット、前歯正中線の偏位が有意に大きく、アングルの分類ではアングルⅠ級がコントロール群で有意に多く、アングルⅡ級では片頭痛群で有意に多かった。 $(p<0.05)$ 。

片頭痛群とコントロール群間では、模型所見でいくつかの特徴的な所見が認められた。以上の結果より、一次性頭痛を対象とした先行研究と同じように、片頭痛患者にも不正咬合において特徴があった。片頭痛の発生機序はいまだ明らかではないが、その誘発要因の一つとして不正咬合が考えられる。今後さらに症例を集積し、片頭痛治療の発展のため更なる研究の必要性が示唆された。